

「東北グローバル考古学—宮城の先史を再発見—」③

ホモ・サピエンス東北へ

阿子島 香

はじめに

館長講座3回目は、人類が日本列島に到達したころの状況について、考えてみましょう。そもそも太古の人類にとって、地域を移動することには、どんな意味があったのでしょうか。また気候、地形、植物相、動物相などの様々な環境条件との関連は、どのようであったのでしょうか。「いったい日本人はいつ、どこから来たのか」という問いは、いつも私たちの大きな関心事であり続けています。今回はそのような問いと合わせて、なぜ、いかに（why and how?）それは起きたかという、プロセス考古学的な課題についても考察してみたいと思います。

日本列島人の起源探求

国際化や価値観の多様化が進む現代ですが、「日本人」を定義することにもそれなりの困難があります。ここでは、古代から近代にいたる日本列島で、多数を構成していた民族集団、程度のゆるい枠組みで考えます。当館開館20周年記念・多賀城跡調査研究所設立50周年記念特別展「蝦夷—古代エミシと律令国家—」（2019年9月～11月、前館長時）も思い出していただければ幸いです。計11回の講演会・講座などを実施しましたが、しばしば講堂からあふれるほどの多くの参加者に来ていただき有難うございました。ところで、律令国家の時代に限らず、列島中央地域に対して、北方、南方に別の文化や集団が存在したのは、縄文時代以来の常なる日本の姿でした。後期旧石器時代でも、やはり北方、南方、そして「古本州島」内部での地域性はありました。地域色は、ナイフ形石器の型式差に典型的に現れています。「古本州島」というのは、寒冷な氷期でしたので海面が低下して瀬戸内海は陸化し、本州・四国・九州がつながっていました。北海道はサハリンや南千島と陸続きで、大陸の一部だった「古北海道半島」と呼ばれています。

日本列島に現生人類（新人）が到達したのは、およそ4万年前のことでした。後期旧石器文化の列島拡散です。それ以前の日本列島と人類との関わりについては、諸説があります。旧石器遺跡発掘捏造事件の発覚から20年が経過して、学会でも多くの研究が蓄積されてきました。それ以前の可能性がある遺跡として、すでに数十カ所が報告されてきていますが、しかし学会での一致はみていません。存否論争という二者択一の発想になりがちなのは、この事件の後遺症と言えるかもしれません。この事件の深い反省もあり、2003年に

は専門学会として「日本旧石器学会」が設立されました。オープンな議論と研究の国際化が進展しました。私は昨年まで会長を1期務めました。

多くのスライドを見ながら、東北大学考古学研究室が1964年から行なってきた、古い石器文化の探索に焦点をあてて、それらの遺跡の実際の状況を紹介していきたいと思います。大分県早水台遺跡（そうずだいと読みます）、栃木県星野遺跡、群馬県鶴ヶ谷東遺跡などを取り上げます。この問題は結論が急がれがちですが、より重要なのは、それぞれの遺跡で、どのような問題が研究されてきたかということでしょう。遺跡・遺物から仮説を考えて、さらに深く科学的に追求するサイクルの確立が課題なのです。

東北地方最古級の遺跡

4万年前から十数万年前まで遡ると、ヨーロッパではちょうどネアンデルタール人が多くの遺跡を残した時代になります。フランス南西部レ・ゼジーの国立先史博物館の復元ジオラマを見て、私たちに似ているか、随分と違うか、どうお感じになるでしょうか。ずんぐりと寒冷地適応の進んだ身体を持ち、鋭いフリント製石器を製作していました。朝鮮半島では、ハンドアックスを持つ「全谷里文化」の後、4～6万年くらい前の遺跡調査はまだ少数で、今後に期待されます。

東北地方では、全国的に見ても前・中期旧石器の可能性が高い遺跡として、岩手県遠野市（旧宮守村）の金取遺跡があげられます。遺跡は猿ヶ石川水系の中位段丘上にあり、1985年に発掘調査が実施されました。2003年、2004年に第2・3次調査が学際的体制で行われ、遺跡の意義が確認されました。当初の調査区域が土木工事で消滅してしまったことが残念です。第Ⅲ文化層の石器集中部から、ホルンフェルス製の大型石器、珪質頁岩製の小型石器など40点が出土し、炭化物も検出されています。第Ⅳ文化層では、楕円形石器、チョッパー、チョッピング・トゥール、スクレイパーなど8点が出土しています。火山灰分析およびC14年代測定から、黒田他（2017）は、第Ⅲ文化層が3.5～6.8万年前、第Ⅳ文化層は6.8～8.5万年前に位置づけています。

前期旧石器研究の歴史

大分県日出町早水台遺跡は、古くから縄文早期押型文（おしがたもん）土器の標識的な遺跡として知られていました。別府湾に面する海岸段丘上にあつて、ミカン畑造成に先立ち発掘が行われました。古い地層から石器を見出した芹沢長介先生は、1964年4月に東北大学考古学研究室を率いて発掘調査（第5次調査）を実施して、日本にも3万年前をさかのぼる「前期旧石器時代」が存在したと提唱しました。

安山岩角礫を多く含む層から、主に石英脈岩や石英粗面岩を加工した石器と素材原石425点が出土しました。石器の種類はチョッパー、チョッピング・トゥール、ハンドアックス、ピック、尖頭器、スクレイパー、彫刻刀などがあり、大型の両面加工石器と小型石器の別がありました。写真でご紹介するように、一目見ただけでは、なかなか理解しにくいかもしれ

ませんが、加工痕である剥離面を認識していくと、石器形態の理解が進みます。石器の研究には、繰り返して観察経験を重ねることも重要です。

その後、芹沢先生は、関東地方北部にフィールドを移して、重なり合っている火山灰層との関係を含めて、前期旧石器文化の追求を続けました。関東ローム層という厚い赤土層の中で、深く発掘を進めました。栃木市星野遺跡は縄文時代の集落跡で公園になっています。沢筋を上った E トレンチという地点を、1973 年の第 4 次調査では、地表下 14m まで掘り下げました。私は最後の第 5 次調査（1978 年）に、芹沢先生と新任の須藤隆助教授の下で、大学院 1 年生として、さらに深く掘り下げる発掘に参加しました。ハシゴでトレンチの底に降りて掘った経験は、今も忘れることができません。星野遺跡では、第 13 文化層まで認識しました。約 4 万年前に降下した鹿沼軽石層の下位に、文化層が重層していたのです。

チャート（珪岩）を材料に、チョッパー、尖頭石器、スクレイパー、彫刻刀、ナイフなどの小型石器を主にしています。この地点は現在、栃木市立の「地層たんけん館」として、トレンチの壁に火山灰が堆積している様子を、現地で公開しています。

しかし、学会では、珪岩の自然石が大量に存在する場所に立地している地形や、人工の剥離痕がわかりにくいといった批判があり、懐疑的な意見も相当ありました。研究史上では、「前期旧石器存否論争」と言われるものです。星野遺跡の発掘の契機になった故・斎藤恒民氏は、現地に私財を投じて記念館を作り、地層たんけん館の工事中にも丹念に石器を回収して保管していました。東北大学柳田名誉教授も協力して、栃木市により公開されることになりました。チャートを主な石材とする前期旧石器は、今も研究が続いているのです。

早水台遺跡の再発掘調査

早水台遺跡の再発掘調査は、2001 年、2002 年に、東北大学によって実施されました。第 6 次、7 次、8 次調査になります。諸般の事情で私は参加を得ませんでした。資料整理、分析、報告の過程では、柳田俊雄名誉教授と協力し、国際学会等の専門家検討にも供しています。中国科学院古脊椎動物与古人類研究所の李超榮教授との共同研究も実施することができました。当館の小野章太郎学芸員は大学院時代に積極的に関わりました。公式報告書 2 冊は、東北大学総合学術博物館の紀要として、英文付きで発表、オープンにダウンロードできます。専門的ですが、是非ご覧になってください。スライドでは代表的な石器を解説します。少なくとも 5 万年よりも古く、柳田教授は 7～8 万年前の全国的な編年観を発表しています。

群馬県鶴ヶ谷東遺跡の発掘

鶴ヶ谷東遺跡は、群馬県桐生市に所在し標高は約 230m で、かつて相沢忠洋氏が石器を発見した不二山遺跡が付近にありました。芹沢先生の指導下、東北大学柳田、阿子島の担当

により 2004 年、2005 年に発掘調査を実施しました。2 カ所の発掘区から、3 枚の文化層が発掘されました。スクレイパー、彫刻刀、ノッチ、錐形石器など、チャート製の小型石器を主にしています。注目されるのは、人工品と認定された石器数と、自然石（チャート礫）との比率です。第 1 文化層では、石器 126 点に対して自然礫 343 点、チャンク 28 点、第 2 文化層では、石器 94 点に対して自然礫 137 点、チャンク 11 点、第 3 文化層では、石器 17 点に対して、自然礫 16 点以上という数になりました。（チャンクは、中国科学院の李先生と早水台遺跡研究で設定したカテゴリーで、中間的な剥離資料）。

石器認定について現場で判断することはせず、すべての資料を点取り発掘した結果で、従来の珪岩製旧石器の知見を変える資料です。星野遺跡、岩宿遺跡 D 地点などでは、大量の自然石の堆積層中から、少数の石器が抽出された出土状況であったので、学会論争中で批判がありました。芹沢先生は、2006 年 3 月 16 日に急逝されて、柳田と阿子島を中心に公式報告をまとめました。こちら東北大学附属図書館から、オープンアクセスできます。テフロクロノロジーといって、火山灰層との関係から石器の年代を推定します。鶴ヶ谷東遺跡は、海洋酸素同位体ステージ 4 期（約 5.9～7.4 万年前）に位置づけられます（柳田・阿子島 2015）。

「小集団連続絶滅仮説」

本講座では、館長なりの人類渡来仮説を提示して、今後何が必要とされるかも考えたいと思います。ネアンデルタール人と同じ頃から、10 万年前より古い可能性もある最古の渡来集団が、アジア大陸から流れてきました。約 4 万年前までに、数段階の石器文化の変遷が認められますが、大陸での石器文化と特徴を共有しています。スクレイパーなど多数の小型石器に、ハンドアックスなど少数の大型両面加工石器が伴うこと、石器の素材製作に両極剥離技術（台石の上でハンマーをあてる）が多用されること、調整加工に交互剥離技術（ジグザグ状の刃部が形成される）が適用されること、石器の形態に大陸との共通性がうかがわれること（ハンドアックスやクリーバー、チョッパー、尖頭石器、スクレイパー、鋸歯縁石器、祖型彫刻刀など）、石英系やチャートの石材を多用すること、などがあげられます。

しかし、列島での遺跡分布は極めて希薄であります。また石器製作の技術水準も非常に粗雑で、大陸との差が認められます。人工品かどうか専門家でも意見が分かれる石器も多く含まれるほどです。日本列島における人類集団の適応放散はあまり成功せず、技術的な退化、文化水準の維持継承の問題、居住の断続、あるいは人類の小集団が再生産されずに絶滅した運命の可能性も考えるべきでしょう。中国から朝鮮半島までの古い石器文化の量と質に比較して相異なる様相が認められます。

極東にある島嶼部という環境と、人類集団の不適応との関連が考えられます。旧人段階（あるいは原人のアジア的進化段階）の人類は、新人とは行動や思考のレベルに大きな差異が存在しました。列島地域の地理的な狭さは、広範囲の移動による適応を限定しました。

動植物資源の年々変動などに対しても、別の土地への移動という対応は困難な居住地域でした。火山灰層の厚い堆積が示すような自然災害に対しても、新人レベルの高度な行動的対応は、できなかつたと考えられます。社会的には、小集団が他集団と出会う機会も限定されていたでしょう。長期的に人口規模を維持しがたい状況に至った可能性もあります。環境諸条件との関係を考え、生態人類学的な進化理論を援用しての、シミュレーションなどの研究手法は、学際的な今後の課題です。

文化という適応能力

渡海術を有しなかつた旧人段階までの人類は、偶然の要因などで、列島にやってきたのかもしれない。数百年以上という大きなスケールで考えれば、資源の減少や枯渇という問題に直面した可能性もあります。限られた島内環境は、集団が先細りする要因になったのかもしれない。何度かやってきた渡来小集団は、文化力（文化人類学理論での、後天的な「カルチャー」）を長期的に十分に維持し継承できず、石器は粗雑化していき、またしばしば世代交代が限定され、消えていった運命もあり得ました。

遺跡遺物をたどれる約 10 万年前からでも、6 万年以上にわたって、このような状況があった可能性を考えています。いわば「小集団連続絶滅仮説」と呼べるでしょう。少数ながら確実な遺跡は存在しますが、現生人類（縄文人からさかのぼる、日本人の祖先としての新人集団）が残した 4 万年前以降との、その格段の量的質的な差異は、あまりにも対照的で明瞭です。後期旧石器時代には、日本列島全体で、のべ 14542 カ所（地点としては 10150）もの遺跡が確認されています（日本旧石器学会 2010）。

4 万年前の前後で、過渡的な性格が認められる石器群も指摘されており、全くの断絶という状況でもありません。使用石材で関東地方にチャートが多い、関東から東北にかけて祖型のナイフがある、切出し形石器、台形様石器の評価、後期とは異なる大型剥片の石器群がある、後期の最初には石刃がみられない等々、さまざまな指摘と論議が行われています。かなり複雑なプロセスがあったようです。大半が酸性土壌に覆われた日本列島では、化石人骨の発見は困難で、ヨーロッパのような旧人新人の交替劇研究を、難しくしています。

ホモ・サピエンス東北へ

新人は日本列島で新たな適応方策を発展させました。特筆されるべき文化現象がいくつかあげられます。ほぼ 3 万年前までに限られますが、大規模な「環状ブロック群」という、円形のムラを構成していました。群馬県、長野県など東日本に顕著です。大型動物の集団猟との関連が推定されています。集団間ネットワークも想定されます。「旧石器時代の磨製石器」が、列島内で特に発達するのもほぼ同時のことでした。また「落し穴猟」が行われた証拠が、静岡県などで見つかっています。石器製作に適する原石から、多数の素材を連続して製作する技術も発達しました。石刃技法、米ヶ森技法、瀬戸内技法などが代表的です。

北、西、南のいずれから列島に渡来したかについては、限定して考えなくともよいでしょう。新人は、何派にもわたり繰り返し各方面から渡来して、各地域の環境条件に適応していきました。国立科学博物館の実験考古学による南西諸島への渡航実験「3万年前の航海」（海部陽介氏）が示すように、後期旧石器時代の文化で渡海は可能でした。寒冷期には氷橋も考えられます。周辺大陸との石器群の類似も見られます。そして、上記の列島独自の文化要素は、大陸部と島嶼部との差異として考察することもできるでしょう。ホモ・サピエンスが東北へ移動、定着したのも、列島全体と同じ頃の出来事でした。

おわりに

以上、日本列島に渡来してきた人々について考えてみました。仮にテレビの歴史番組でしたなら、画面に小さく「諸説あります」と表示されているかもしれません。異なる学説が並んで、議論を重ねることができるのは、自由な学問の大切さと思います。諸説があるのは、学問にとって、むしろ健全なことではないでしょうか。大事なのは、どのように実証的に、根拠に基づき客観的に考えていくかという点でしょう。博物館が果たすべき役割の一つは、学術研究の成果をバランス良く皆さんに伝えることであると思います。日本列島人の起源については、非常に多くの文献が出ており、内容も多様です。それらと対比してバランスをとる意味も込めて、本日の講座内容にしてみました。私たちが誇りにしたい郷土の祖先たちの集団が、絶滅の運命にあったのかもしれないなどは、あまり考えたくありませんが、しかし悠久なる人類の歴史を客観的な視点で見直していくということも、また重要なことでしょう。今後、人類の将来を担っていく子孫たちのためにも。コロナ禍の中、大勢の皆さんにご来場いただきました。時間超過してしまいましたが、ご清聴ありがとうございました。

参考文献

阿子島香（2015）「氷河時代の人類生活を探る」阿子島香編『北の原始時代』第1章。吉川弘文館。

仙台市史編纂委員会編（2005）『仙台市史 通史編1 原始 旧石器時代（改訂版）』（阿子島分担執筆）

柳田俊雄（2011）「大分県早水台遺跡第8次調査の研究報告」*Bulletin of the Tohoku University Museum, No.10*.（東北大学附属図書館サイト「機関レポジトリ」から、無料ダウンロードできます）。

柳田俊雄・阿子島香（2015）「群馬県鶴ヶ谷東遺跡発掘調査の研究報告」*Bulletin of the Tohoku University Museum, No.14*.（同上）。